

の 面目もなや 面を被つて 盲ら蒔して 命婦の戀の  
めつきり瘦せた めつきり赤し めのとを呼びぬ

モノ部

物静か 物言ひ 物干に 物寂し 物思ふ 物影に  
物音の 物語り 物忘れ 物事は 物貫ひ 物置きに  
物賣りは 物恐れ 物堅さ 物奇さに 物しけり 物見  
から 物狂ひ 物見臺 物惜しけ 持て余す 持ち心  
持ち直し 持ち出して 持歩く 持火繩 持ちあぐみ  
持ち替へて 持ち通し 戻る人 戻り來て 貫ひ物 貫  
ひ泣き 貫ひ風呂 貫ひ子の 貫ひ燃し 貫ひ乳 最と  
も先の 最合膳 最一トつの 最木曾の 最灸の 餅の

札 餅嫌ひ 餅投ぐる 餅腹を 餅搗も 餅を切る  
餅庭 餅粽 餅の音 餅の花 餅の香も 餅になる  
若しやとて 元船 元の影 素のゆ水 素の巢へ 紅葉見  
の 紅葉色 紅絹いたす 諸々の 諸共に 桃の酒 桃  
の餅 揉み出した 揉手哉 燃え立つた 燃るかど 燃  
るほど 洩れかゝる 洩れる乳の 洩れ残り 木綿着た  
木綿よる 綱竿の 綱かけて 喪を秘して 喪に逢ふや  
文字の關 用ひ來て 毛布着て 勿體に 設けたる  
股だちの 裳裾引く もしだちの もだれけり ものよ  
けて もつれたる もどかしく もやくくと もちつとに  
もたれ寄る もだれけり もつれかな 物の音なし  
物は空なり 物も着せたま 物の初めや 物てさもなし

物憂き顔や 物とこそ知れ 物なき船や 物にも寄らず  
 物の定めや 物皆寂ひて ものゝ見事な 物問ひかける  
 物の習ひの ものノ香のして 物荷ひ行く 物の一つや  
 戻れば淋し 戻り落合ふ 戻れば頓て 戻る日和や 持つ  
 とも見へぬ 燃へて淋しき 燃へ屑落ちる 貰ふ新茶の  
 餅に糞する 餅に花咲く もうちらほらと 最合に祝ふ  
 諸肌ぬいて 素の姿や 文字は大きし 文字から眠し 文  
 字を抑へて もてなし振りや 粗する唄も 粗白ふみの  
 粗の芽青し 木綿流るゝ 木魚に青さ もたれ心の もの  
 うかりける もまれし敏の

やノ部

宿の主 宿の妻 宿帳や 宿引きの 宿りかな 宿る神  
 病癒て 病む人の 様子哉 安い事 安い物 易か  
 らん 焼跡を 焼栗の 較しばし 稍老し 屋形船  
 矢先哉 矢聲哉 夜學哉 夜具布團 破れ庵や 破れ  
 がち 破れ傘 瘦せ丈の 瘦ながら 八千代をも 八重  
 たすき 八重一重 頓て刈る 頓て咲く 頓て降る 藥  
 學を 藥禮の 役者衆の 鎗持や 鎗の間や 社ありて  
 雇ふ毎 やけと哉 休む目先さや 休むや鋏を 大和  
 心や 宿かる頃や 八重の噂や 八起に越すや 八棟洗ふ  
 頓て着さけり 和らかにさす 矢竹心や 矢數の庭や  
 矢取する子の 箭竹の伸や 易き姿や 安さに起きて  
 安き思いや 較々傾きて 較醒めたれど 稍疲れたる 破

れ盡して 遣羽子に餘念 遣り羽子を見て 瘦も直らず  
 瘦せ哀ひて 瘦せた身なりや 鎗先なまる 槍一筋の 槍  
 の穂先さや 灸据へけり 櫓太鼓を 櫓冷たき 病の垢を  
 ・ 病怠たる 藥草呉れぬ 藥師に詣て 奴の助は やつ  
 る戀が やつと待つ子に

部

行く一人 行掛哉 行々きて 行がけの駄賃に 行違ふ  
 行小袖 往來哉 夢に入る 夢もあり 湯の汗や 湯  
 浴せし 湯烟りの 湯のたぎる 湯加減 湯婆 譲りの  
 結び直す 結つめて 弓引きし 弓引きし 弓矢哉  
 緩む音 緩み哉 油煙かな 床しけれ 遊來して 遊

山旅 弛む手に 委ね得て 揺れこぼれ 揺れるほど  
 ゆつくりと ゆくり合ふ ゆとり哉 ゆつたりと 柚味噌  
 つくる 行衛や廣さ 行逢ふ人や 行く石女や 行く音を  
 らじ 往來にあふも 往來にあるや 往來あふなし 夢も  
 結ばず 夢つき破る 夢の中なり 夢て嬉しや 湯婆抱き  
 たる 湯貫ひ一人 湯氣に小暗さ 湯婆干すや 湯あひ果  
 てたる 浴衣の早さ 浴衣に残る 豊かに昇る 豊かさ見  
 せつ 弓の稽古や 弓矢取る身も 指の稽古や 結込れけ  
 り 弛みにそれる 弛みの早し 由緒たゞしき 床しさも  
 のや 床しさ垣や 床しさに灯を 柚味噌匂ふや 柚味噌  
 の蓋や 柚味噌の底を ゆたうくと ゆつたり戦く ゆ  
 らりともせず ゆるき流れの ゆとりもありて ゆかみ咲け

よノ部

り ゆつれの見ゆる ゆかひへらした ゆるぎ止みぬる  
 世の旅に 世に出たり 世の奢り 世の馬鹿か 世にたり  
 し よき人の よき衣 用意した 用意哉 酔さめや  
 酔どれて 酔ふして 寄りあふや・寄り心 呼ぶ聲や  
 よび戻せ 嫁の籠 よそにして よそ心 横に咲く  
 横歩き 齡哉 容赦して 弱るほど 弱法師 淀を出て  
 過ぎりあふ よろくと よいと泣く よし降らば 世を  
 や翔らん 世を遁るゝや 世を一杯の 世は中々や 世を  
 忍び音の 世をふる雛の 世を睨みけり よき濕りなり  
 善機嫌らし よき雨乞の よき隣あり よくも男に よき

らノ部

構へなり 善き宿からん よきさぬ濡るゝ 佳き墨匂ふ  
 呼びに出にけり 呼び合ふ人や 汚れて出たり よそへ流れ  
 て 他所に拜むや よそになりけり 用かと聞けば 用意  
 してけり 寄るとも見へず 寄る聲でなし 寄り倒したる  
 寄せても清し 吉野丸太の 慾の崩るゝ 粧ひ付けし  
 粧ふ色の 齡重ねん 齡保たし 齡久しき 因りて案山子  
 の 嫁の髪結ふ 嫁入濟ます 嫁の譽れや 横に遮ざる  
 横櫛さしぬ 横切て飛ぶ 鎧抜きけり 鎧櫃まで 除け  
 く 這入る 除けて通すや よりも美し よきや蒲團の

落髪を

落語哉

樂々と

樂座して

樂寢した

老夫子

の 老爺哉 埒もなき 埒明かぬ らしうめく らしく  
せよ 落書哉 埒なき人や 羅漢顔して 羅漢の煤を  
裸體の像や 老尼の語る 老翁の住む

リノ部

料理ぶり 料理哉 料理の間 利休箸 慮外なり 慮外  
して 凜として 龍の住む 龍化して 李達の歌 李四  
もあり 両方にまつや 両手の筈や 立派に受ける 立派  
に歩く 料理はこれぞ 料理に向ふ 理髪か櫓の 梁山伯  
の

るノ部

留守居して 留守の内 留守ながら 留守を聞く 留守の  
神 留守にして 留守頼む 留守に来て 留守なれや  
留守居哉 累々と 類なきに 類をもて 縷の如し 留  
守を守るや 留守して聞かや 留守に問ひ来て 類集るや  
累々然と 累世の恥 累卵の世や

れノ部

禮者哉 禮するや 禮に来て 禮祭り 連歌師の 連坐  
して 歴々と 歴世皆 戀々と 聯を見て 聯一つ  
聯かけて 例の客 例年の 例祭の 例を踏む 列坐み  
な 靈妙な 獵師来て 禮者も来る 禮に水打つ 禮者  
絶へたる 禮者ゆゑしや 禮に嫁かす 禮者送りつ 連歌

果てたる 連理の枝や 連坐して待つ 練兵を見る 練兵  
や 聯隊あげて 列車の敷や 靈驗著し 獵師の放つ  
獵師出て来る 獵銃さげて

ろノ部

艦拍子を 艦の雫 爐の一間 爐開いて 爐塞さし 爐  
の近み 爐のほとり 爐をあけて 露見した 六根も  
六條で 論じけり 論破して 祿を得て 祿高き 鹵簿  
の人 鹵簿凜と 漏計の 碌々に 櫓の音は 慮生が晝  
寐 慮生か夢や 爐邊の咄しは 爐に切る疊 爐開き濟ん  
で 爐を開く夜の 六條殿の 六十貌の 論語讀んでも

わノ部

笑ふなや 笑ひ哉 笑わせる 笑ひ草 笑ふ可く 我老  
を 我物を 我庇 我事と 我愛 我に似よ 吾酔ふ  
て 吾ねぶり 若かへる 若法師 若衆の 若狭人  
忘れ來し 忘れ來て 忘れ鎌 渡し守 渡る音 渡し船  
渡る朝夕 渡し待つ 別るゝに 別れ哉 分入るや  
分ちけり 湧く火鉢 藁を打ち 藁火たく 藁の香の  
藁灰の 藁頭巾 藁積んで 割箸に 割木部屋 詫び  
て住め 詫寐かな 詫ぶる哉 輪飾を 輪にやせん 綿  
抜いて 綿の簀の 草鞋の緒 草鞋がけ 草鞋くひ 脇  
差の 脇びらも 脇僧は 早稻酒や 和歌に痩せ 椀開

き 椀の中 沸明げて 沸く湯氣に 蕨汁 童顔 わ  
 かくと わけてもや わりくと わりなしや わん  
 ぱくを裸にむぐや 笑ひ初めけり 笑ひ納めて 我をかくし  
 て 我手短かさ 我友にせん 我名呼ばれて 我うづく  
 まる 我は老ひける 我年訪ひぬ 我語るや 我鼻なめる  
 我に米かせ 我吾を養ふ 吾世と寐たり 吾に念佛を  
 我物顔や 我影寂し 渡る此方や 渡りて長さ 渡し待  
 つ間の 別れて暑さ 別れて立つや 分けて光るや 分た  
 んとするや 分つ巧みの 忘れてぬくし 忘れたらしや  
 忘れ音になく 忘れぬ二日 忘れ頭巾を 若衆醉す 若君  
 抱さし 若菜つみ出す 若水浴びる 若侍や 業にはあら  
 ず 業になれたる 業の利きたる 輪炭や爐にも 輪飾り

かけし 輪飾り祝ふ 草鞋のすれの 草鞋の軽し 椀にう  
 つるや 椀に冷たき 脇目に疎とし 畏にかゝりし 轍の  
 跡や 轍のひびき 綿とる袖に 綿さへ脱かば 割れてお  
 かしや 割なき戀や 割なき友や 割て見せけり 王維か  
 家の 和歌三神を 和田北條の 和魂を祭る 態と見に来  
 て 鶯掴みして 煩はしくも 煩らう世なり

動物

あノ部

鮎の脊の 鮎の寂 鮎汲や 鮎眼を過ぎぬ 網の魚 蛇  
 の目の 蛇去つて 蛇の足 蟻一つ 齧る鶉の目 蟻の  
 道 蟻にも恥ぢよ 蟻一疋に 蟻におどろく 鶉の眞似  
 を 鮎鱗も出たり 鮎鱗の口 家鴨の騒ぐ 家鴨追ひ込む  
 家鴨追ふなる 鮎さながらに あされし蚤の 阿房鳥や  
 鯛得て 秋の蚊弱し 秋の小魚の

いゝるノ部

一羽来て 一羽去る 嘶くや 犬を追ふ 犬は寒さ 犬  
 に逢ふ 蟲取る 鯉網 鰯追ふて 鯉雲 鰯引き 鰯  
 こぼるゝ 鰯を分けて 鰯買ひ居る 犬の子のなく 犬追ひ  
 戻す 犬に親しむ 犬に吠えられ 犬に教へし 犬こそ愛  
 す 妹脊や蝶の 怒る螻蛄 怒つては飛び いた鶯の  
 蟲飛び込む 居乍ら蚤の

うノ部

牛の角文字 涎文字 牛引いて 牛の聲 牛を打つ 牛濡る  
 馬の逃や 馬の汗 馬逃げて 馬叱かる 馬の顔出  
 す 馬除けて 馬の肥 馬の荷に 馬の面 鶉の群れて  
 鶉の羽哉 魚あぶる 魚光る 魚棚や 魚跳ねて 魚多



き 魚遊ぶ 魚の飛ぶ 魚の動かざる 鰻搔き 宇賀は  
 蛇 牛の跡行く 牛ねふる 牛も初音を 牛は佛と 馬  
 の稽古や 馬も夜道の 馬から落ちし 馬洗ひ居る 馬で  
 迎ひや 馬の日脚や 馬集まりし 馬を勧むる 馬驕りたる  
 馬の刈毛や 歌申上ぐ蛙哉 鶯真似て 鶯啼くや 鶯  
 谷に 鶯の身を逆に 鶯調子 魚盗みけり 魚の瘦たる  
 魚掠めたる 魚跳ね上る 魚釣りおとす 魚の少なき  
 鶺鴒の目賢き 鶺鴒のやるせなき 鶺鴒の追ひつめし 魚の音暗し  
 兎追ひ出す 兎をつかむ 兎狩り出す 鱗の光る

え、ゑノ部

海老の鬚 海老跳ね込むや 海老煮るほどの 蝦かさ高に

お、をノ部

お馬が参る 御玉杓子や 愚かな鹿の 怖れ嘶く 鴛鴦の  
 囀り 鴛鴦古りし 鴛鴦流れ去る おとり

かノ部

蚊を拂ふ 蚊と呼べど 蚊柱の 蚊の屍 蚊の聲や 蚊  
 のうなり 蚊の迷ひ 蚊のよはり 蚊の五月 雁の行く  
 雁来るや 雁鳴くや 雁の影 雁通る 雁聞いて 雁  
 風呂や 雁の友 雁低く 雁のつら 雁が音や 雁の腹  
 墓の鈍さ 墓の聲 蛙飛んで 蛙鳴いて 蛙子の  
 蛙聞さに 飼猫の 龜遊ぶ 鴨鳴くや 鴨群れて 鴨の

寄る 鴨提げて 蟹の眼も 蟹の泡 牡蠣をむく 牡蠣  
 飯や 牡蠣船や 鶯鳥飼ふ 鴨鳴きけり 鴨黒むや 鴨  
 くれ行く 鴨の群や 鴨の覗く 鴨おとしは 鴨追ふ子も  
 鴉歸るや 鴨の浮寐の 鴨の河原の 雁の足跡 雁一  
 聲の雁聞く山の 蟹這ひ上る 蟹逃げ足の 蚊に罵れる  
 蚊になる頃や 蚊もなく秋の 蚊にさゝれたる 蚊に女房の  
 蛙鳴く夜や 蛙自在や 蛙生るゝ 蛙に眠き 蛙浮い  
 て 蛙ふせたる 蛙の夜なり 蛙を友に 蛙閑なる 蟹  
 養ふ 蟹の損を 蟹生れて 龜の脊を干す 龜は踊りて  
 飼ふ山雀の 鴨の浮寐の 蟹神 蟹時 蟹棚

きノ部

窮鼠猫を 雉の聲 雉打つて 雉を追ふ 雉鳴くや 雉  
 笛に 雉つけて 雉の尾の 金魚の子 狐に似たり 狐  
 も留守や 狐の化けし 雉鳴き過ぐる 雉子の散毛や 雉  
 追出す 雉子鳴飛んで 雉子しとめたる 雉子近よりぬ  
 雉子の子を獲て 金魚の水や 金魚涼し 木兎の鳴く さ  
 たい哉

くノ部

水鷄鳴く 蜘蛛の困は 蜘蛛の脚 蜘蛛の糸引く 水鷄さ  
 く 孔雀飼ふて 鯨船 熊蜂の巢を 蜘蛛の巧みの 蜘蛛  
 蜘蛛の巢拂ふ 首出す鶴や 叢を蚊の

けノ部

毛虫落ちけり 毛虫をはさむ 毛虫に掃くや 毛虫しづめる  
毛虫流るゝ 毛虫盡きたる 桁行く鼠

こノ部

小蝶來よ 駒つなぐ 鯉の簀や 鯉跳ねて 犢引く 吞  
飼吋 蠶飼棚 蠶の庭 烹猫の貌 小鳥や鷹の 小雲雀  
つかむ 胡蝶とならん 鯉集まるや 鯉一隅に 鯉深く沈  
む 心もとなき海鼠貌

さノ部

小男鹿の 雑魚よりし 猿芝居見る 猿真似の 鷺一羽  
囀り合ふや 囀り足らぬ 猿の齒ぐさの 猿と語りて  
猿と寐たる 鷺イひて

しノ部

蜆汁 蜆賣りの 鴨立つて 鴨の都鴨つくや 鴨の夕  
獅子の吼ふ 猪垣に 猪喰ふた 親しむ鴛鴦の 白魚舟の  
鹿に焦れて 鹿の足跡 鹿に出逢ふや 鹿のねて居る  
鹿の毛並や 鹿笛なりし 鹿を狩り出す 鹽鱈の湯の  
蜆盡りけり 蜆に交るしばなくや

すノ部

巢立して 菓を守る 巢籠りの 巢を守る 巢をやくや  
 巢鳥哉 雀子の 雀海に入り 雀蛤に 巢の營みや  
 巢を見て來たり 雀の親子 雀も來たり 雀交る 雀の群  
 れる 雀の笑ふ 雀あぶなき 雀の覗く 鱸の巨口  
 鱸を問ふや

せノ部

蟬の都 蟬取りや 蟬の衣 蟬の殻 蟬一聲の蟬も涼しき  
 蟬に吸はれて 蟬の時雨や 蟬の音高し 鶺鴒の尾の

そノ部

空に蝦蟇 袖に蟬鳴く それん鳴く蚊の

たノ部

立つ鳴の 鷹に遠く 鷹の羽音や 鯛の味 鯛ねぎる  
 鯛の道の 田螺轉らぬ 田螺泥ふく 田螺拾ふや 叩へは  
 水鶴 鯛を翳や 鯛切る音や 鯛もあるのに 鯛乏しくて  
 鯛買ふ人や 鯛と呼ばれて 鷹の行衛や 鷹にこぼるゝ  
 狸石打つ

ちノ部

千鳥立つ 千鳥聞く 町人の鶏 千鳥や須磨の 千鳥なく  
 夜の 千鳥や磯に 千鳥や風の 千鳥集る 千鳥は遠く  
 ちらつく鮎の ちんばの猫や

つノ部

鶴の都 鶴舞ふて 鶴立つて 鶴の脊に 燕の巢 燕の  
 冀 鶴の羽伸ばす 鶴の氣高さ 鶴の跳落す 鶴の居直る  
 鶴の嘴より 燕子廉の 燕飛交ふ 燕の巢立つ 番い  
 となりし

てノ部

蝶ちらり 蝶泊めた 蝶に化す 蝶立つや 蝶の聞 蝶  
 かるし 蝶二つ蝶番ひ 蝶高し 蝶追ふや 蝶の影とす蝶  
 舞ふや 出たか巢鳥の 蝶の眠りを 蝶の羽題や 蝶も便  
 らず 蝶の名てなし 蝶のはなれず 蝶も慕ふや 蝶々舞

ふや

とノ部

鳥巢立 鳥の鳴く 鳥の來る 鳥に暮る 鳥の名を 鳥  
 打て 鶏泳ふ 鶏の都 飛ぶ羽蛾 鳶高く 鳶舞ふて  
 泥龜這ふ 鶏も謠ふや 鶏は聞かぬに 鶏の身振ふ 鶏  
 商人や 鶏の追はるゝ 鶏にも祝ふ 鳥のおそれや 鳥ま  
 つ空や 鳥の高音や 鳥の羽ふりの 鳥の餌れや 鳥見て  
 醒めし 鳥や餘重の 取る蟲のあり 飛ふや緋鯉の 飛べ  
 ば蛙の 鳶舞落つる 鳶舞ひ雲の 鳶より高し 鳶の怒  
 かる 蟪蛄の斧 鳶の輪

なノ部

鳴く田螺 何鳥の來て 七月鶏見る 鯰提けたる 鯰公喰ふ

にノ部

鳩の留守 留の古巢や 鳩近ふ 逃げて囀する 鳩の浮巢や 鳩の月夜や 鶏あさる

ぬノ部

盗人蜂に ぬからぬ鴨の 濡れし羽色

ねノ部

ねる胡蝶 猫の戀 猫の妻 鼠つく鼠獨りて 罌を學に 罌まどひす 罌預けて 猫の寝返る 猫も紙子も 猫も不二見る 猫を追ひやる 猫の戀さく 猫うづくまる 猫のさわぎや 猫驚かす 鼠おとしや 鼠も寝たり 鼠音なし 鼠の音す 鼠の走る

のノ部

野飼の馬の 軒を雀の のら猫盗む 遁れし蟬の 蚤負けや 蚤のさぬ 蚤除けや 蚤飛込む 蚤に起き 蚤に寝ね夜や 蚤の術 蚤逃かしたる 蚤の促かす 蚤の四月に

蚤に疲れて 蚤虱

はノ部

初雁や 初音聞く 裸馬 羽蛾飛ぶや 孕み廉 蠅打て  
 は 蠅の數 蠅一つ 蠅よけて 蜂の主 蜂の留守  
 蜂老て 蜂の毒 蜂の腰 鳩の豆 鳩啼て 嘴ならず  
 初音貫ふや 走る鼠や 放つ蜻蛉や 羽音や鷹も 孕む  
 雀の 羽風を逃ぐる 羽風を握る 鳩吹人や 蠅打つ老の  
 蠅のたかりし 蜂の通ひや 蜂に驚く 蜂を拂ふや  
 蜂に螫れし 蜂現なき 蜂や旅蟹 白蛇の祠 蛤なくや  
 蛤を得し 蛤分かつ 蛤やきや

ひノ部

雲雀野や 雲雀の空や 雲雀も揚げて 雲雀に残る 雲雀  
 は考いて 毘面蜂に 耕鯉の様な 蛸鳴いて

ふノ部

鱒の味 鰻と 鰻に出刃 鰻の友 鰻やめて 河豚の錫  
 河豚の怒り 鮎鮎つくる 鮎浮いて 吹かれる鴉 鰻  
 にはげし 鰻喰乍ら 鰻食ふ人や 鰻の血凍る 河豚  
 の目光る 河豚に其夜の

へノ部

蛇穴を出る 蛇を打つ 蛇喰ふと 蛇の衣ぬぐ 蛇の塚  
隔てぬ鴛鴦の 蛇を彫りたる 蛇又草に 蛇も浮世を  
屁ひり蟲

ほノ部

乾鮭を焼く 螢這ふ 螢火や 螢見や 頬白鳴く 乾鮭  
洗ふ 乾鮭つるす 螢飛素 時鳥鳴くや

まノ部

舞ふ蝶の 又寄る鴛鴦の 松蟲止みぬ まばゆき蝶の  
ぶれて蝶の

みノ部

小鳥なくや 水鳥音す 夜は蚊にかまる 蚯蚓聞く夜や  
蚯蚓の歌も 木兎なぶる

むノ部

蟲鳴くや 蟲近し 蟲の都 蟲に知る 蟲出て、 蟲遠  
し 蟲の吟 蟲ばみし 蟲に聞く 蟲獨りや 蟲に灯を  
蟲の野や 蟲殻や 蟲の庇を 蟲の宿 麥て鮎喰ふ  
蟲の音に知る 蟲は野の音に 蟲色々に 蟲も簑ぬけ  
蟲の音草に 蟲に客あり 蟲の鳴き止む 蟲に静まる 蟲  
のなくだけ 蟲に行燈 蟲も老ひけり 蟲もなくく



めノ部

雌鹿なく 目高のにげる 眼白と語る 眼白もあちる 目  
高をすくふ 雌蝶追ひ來れ 雌鶏呼ぶや 飯の蠅追ふ

もノ部

戻り馬 鴟鳴くや 鴟の贊 百舌落し 百舌なく網に  
百舌なく梢 亂れし蝶の

やノ部

柳鮓や 藪蚊の聲を

ゆノ部

夕告鶏の

よノ部

餘慶や鶏の 呼小鳥 嫁が君出る

るノ部

留守を蠶飼の

ろノ部

驢馬曳て 驢馬に乗る

かノ部

鷺を養ふ

鷺の翼や

植 物

あノ部

青葉若葉の 青柳哉 青竹の 青芽哉 藜より 藜の杖

や 赤き林檎の 愛樹哉 葦の間や 菜の風菜の穂や

紫陽花の枝 青葉勝なる 青梅盗ひ 青葉吹散る あと一

輪は 赤き花咲く 芽戦さて 芽間かくれに 芽間の灯洩

る 茅の笛聞く あの葉この葉の 藍葉の香の朝貌に水

朝貌蒔さつ 朝貌咲いて

いノ部

一枝哉 一二輪 色に咲き出づ 稻の出穂 稻の出来  
 稻刈るや 稻の秋 稻のねて 稻積めは 稻の里 稻庭  
 稻の波 稻の香や 稻穂哉 稻株も 芋洗ふ 芋堀  
 る人や 芋を煮る 芋の露 芋の子芋の葉に 色増や柿や  
 芋に湯氣立つ 芋も育たす 芋の畑や 稻搬く家の  
 稻の田面の 稻刈る頃や 稻の葉ぐるみ 稻荷へ参る 傷  
 めぬ梨の 覆盆子取る手の 稻は蝨に 威あつて花の 涓  
 橋の柳 貴若葉 毬栗の

うゝ部

薄紅葉 裏の梅咲く 瓜の皮むく 瓜一荷 瓜の香の  
 瓜もみや 埋れ木の 獨活の丈 梅の庵 梅香る 梅折

つて 梅探くる 梅の窓 梅に遅速を 梅隣り 梅接て  
 梅紅葉 梅の宿 梅一輪の 梅の里 梅一木 梅唇  
 梅に古き 梅の春 梅寒く 梅に明け 梅に對す 梅干  
 すや 梅の道 梅颯然と 梅ありと思ふ 梅ヶ枝折りて  
 梅の實黄なり 梅の蕾や 梅が香運ぶ 梅さへうるを 梅  
 に當たる 梅憎からず 梅も野飼よ 梅を見越しの 梅た  
 る頃や 梅見る客の 梅の香聞さぬ 梅をふみ込む 梅は  
 明るき 梅か香清き 梅に譲りて 梅の香撰ぶ 梅に接木  
 す 浮草ほしき 浮かふ木影 白になる木や 受ける木の  
 葉の 宇治は茶のみと 疎みし松も 埋ひる花の うら若  
 竹の

え、ゑノ部

枝振りの 枝低き 枝葉迄 枝うつり 梅間洩る 枝垂  
 れて 枝撰み 枝の儘 枝ながら 枝配り 枝柿や  
 枝をし曲けし 枝も乞ひ得ん 枝も無事なり 枝の二ふる  
 枝は浮雲なし 枝のつけめや 枝からちるや 枝葉かくれ  
 に 槐伐られて

お、をノ部

落葉焚て 落葉の夜 落葉ふんて 落葉して 落葉あと  
 落葉搔さけり 落葉時 落葉籠 落穂拾ふ 晩稻哉  
 落葉見る日や 落葉も清し 落葉や谷の 落葉に交る 落

かノ部

葉掃きたる 落葉踏み行く 落葉見よとや 落穂拾はん  
 大雑葉なる 押されて花の 遅き櫻や 奥に花あり 雄蘂  
 とは 折る紅葉 尾花野や 尾花伏す 尾花原 折りた  
 き菊の 尾花の中や 小栗拾ふや 女郎花咲く ぬき  
 枯草や 枯れし木の 枯るゝ音 枯れたかと 枯れんとし  
 て 枯れ細る 柿の皮 柿の澁 柿さげて 柿の味  
 刈株や 鐘に落葉の 枯草積んで 枯葉も見へて 枯木傳  
 へに 枯れ遅れたる 枯木に似たる 枯れし草葉に 枯さ  
 る枝や 枯れこし宿や 柿の花ちる 柿ほの見ゆる 柿の  
 へたととも 紅梅のさく 海棠散るや 海棠を折る 梶の茂

りや

きノ部

木の戦さや 木雫も 木の芽垣 木の影を 木々の香の  
 木地爐縁 木にひびく 木にも似ず 木の高し 木香の  
 立つ 木うつりも 木々の芽や 木の蔭へ 木の股に  
 木々の名も 木の間洩れ 木の根哉 木の末を 木茂る  
 奇木あり 桐の咲く 桐の葉や 落桐の實つる 金柑さび  
 し 菊重ね 菊香ふ 菊の園 菊清し 菊の宴 菊日  
 和 菊若葉 菊合せ 菊小袖 菊の宿 菊翁 菊作り  
 菊の主 菊咲くや 菊過さし 菊の齡 菊苗の 菊  
 活けて 菊黄白菊 黄菊さく 黄ばみけり 黍の葉も

清く咲きけり 木をも竹をも 木に脱きかけし 木さへ優し  
 き木香も移りつ 木に見た葉なり 木の下蔭や 木の芽ふき  
 けり 木の實備へて 木は老いたれど 木から晴れ行く  
 木を切る音の 木香も樂しや 木に影出來て 木も若枝や  
 木は皆梅に 木の下闇の 木鋏の音 木より青し 木に取  
 られけり 木の實竹の實 木の芽摘みけり 木々の芽をふく  
 木の實を喰ふ 木を切り倒す 代りかへす木の 桐の葉  
 摘む 桐芽を吹くや 桐の芽つける 胡瓜に交る 胡瓜切  
 りけり 菊の古根の 菊苗分つ 菊の手入や 菊によき名  
 の菊を活けたる 菊咲き残る 菊の香もあり 菊の根分ける  
 菊頼母しき 菊に灯ともし 菊や葎は 菊を離れず  
 菊の愛たし 黄菊や秋の 黄菊になりし 黄なる花見る

黄ばみかゝりし ぎんなん拾ふ 菌つるして 桔梗もくるゝ  
枳殻の垣や 黍の葉かくれ

くノ部

草に戻るや 草の二葉や 草分けからの 草木にもとる  
草も育ちて 草へ捨つるや 草も聲あり 草に移りて草木用  
なし 草から落ちて 草に聞込む 草枯る中の 草刈る人  
の 草のきこすや 草深き戸を 草の香送る 草のはづれ  
の 草に脱いだる 草に下りたる 草に生るゝ 草の枕や  
草木眺めて 艸ふみつけて 艸に晝寐の草に水吹く 草  
の名も 草暖かに 草の陰 草色々 草若葉 草かくれ  
草紅葉 草の闇 草に入る 草の上 草に居て 草

の丈け 草籠や草せゝり 桑配り 桑芽ふく 桑賣りて

桑の杖 栗落ちて 栗の味 栗開いて 朽葉哉 屑大

根糞膏の 叢光る 花粉飛ぶ 熊笹茂る 草しぼみたる

崩るゝ花の 楠の落葉や 楠のうつろや 栗買うて重き

栗や届かぬ 栗の空しさ 栗の花散る 句を乞ふ萩の

朽ちて絲瓜の 鞍馬の櫻 花壇の並び

けノ部

芥子の畑や 芥子散るや 鶏頭の並ぶ 鶏頭活けて 芥子

は散らずに 鶏頭枯るゝ

こノ部

木高くて 木陰れの 木の葉舟 木の間より 木下かけ  
 木立哉 木の葉ちる 米の香を 梢より 去年の實の  
 五六輪吹く 小草の花の 小松の數や 小松に清き 木  
 立も茂き 木立も寒し 木立の古き 木の實色つけ 木の  
 實をうける 木の葉の輕し 木陰のほしき 木陰を行くや  
 木の間はなれて 梢は高し 梢白みて 梢若やく 梢靜  
 けし 梢に残る 梢に届く 翻れ松葉や 苔の花咲く  
 苔剝けて讀む

さノ部

櫻の幕を 櫻の里や 櫻紅葉す 櫻の宮ぞ 櫻のこり葉  
 櫻にこもる 櫻養ふ 櫻に通ふ 櫻散る日や 櫻人

咲きほこりけり 咲き保ちける 咲き亂れけり 咲初めにけ  
 り 咲き盡したる 咲て跡なし 咲かぬ穂はなし 咲く朝  
 貌や 咲くといふ日は 咲く間短し 咲くや頼母し 咲き  
 損ひぞ 咲き争ふか 咲きはびこりぬ 咲かざるを活けて  
 咲かせけり 咲きながら 咲く力 咲き變る 咲き振り  
 も 咲き進む 咲き處 咲き古りし咲きまさる 咲きこほ  
 れ 咲き満ちて 咲き揃ひけり 咲かし合ひ 莢豆長し  
 盛りの菊を 障る茶の木や 笹葉に千代の 笹の香移る  
 笹の葉たる 笹伐らせけり 笹に鳴く日を 雜木も歌に  
 山茶花散るや 山茶花落ちる 魁を梅に 澤邊の萩の

しノ部

芝生哉 芝積んで 茂る葉に 茂り哉 茂り合ふ 椎の  
 舎の 椎の茶屋 椎の實拾ふ 菖蒲の芽 紫蘇の汁 枝  
 垂木の 松露搔き 薔薇咲く 熟柿哉 熟すまで 静か  
 な木にも 知らぬ木の葉の 白さを梅と 白き花とは 澁  
 柿にして 芝乾きや 芝生の上を 菖蒲も出たり 茂りに  
 添ふや 薔薇ちりけん 薔薇垂れ咲く 薔薇ちりたる 紫  
 蘇の紅 紫苑くゝりし 萎めみし花の 椎の木蔭の 椎の  
 木もあり

すノ部

芒の穂 芒分けて 薄野や 芒伏し 西瓜喰ふ 西瓜手  
 に 西瓜蒔く 杉の古葉や 杉は古びて 杉の木の間

透かぬか花の 芒にかして 芒の風の 芒の疵は 芒吹く  
 野の 芒る上や 芒の雫 芒の岡を 芒に交る 芒をく  
 との 芒さしたる 芒を走る 芒からむや 董かげもつ  
 董に似たる 西瓜浮べて 西瓜を切るや 西瓜を盗む  
 水仙さげし 水仙寒さ 李切り捨て

せノ部

芹洗ふ 芹摘て 芹生ふる 芹焼や 芹の飯 芹を養  
 ふ 芹田に下る 芹はみ出づる 旃檀の實

そノ部

蕎麥の莖 蕎麥植る 蘇鐵に蘭の 蕎麥白し 蕎麥か非か



たノ部

竹の奥 竹伐つて 竹見事 竹の節 竹に寝る 撓む葉  
 や 大根で指す 玉藻打ちこす 竹にも花の 竹の夕邊を  
 竹の影おく 竹の戦さや 竹を忘れな 竹四五本の  
 竹より出て、 竹は隣へ 竹の撓みや 竹にはなるゝ 竹  
 を朝日の 竹の葉毎に 竹の雫や 筍藪や 筍見へて  
 筍ふ貫 筍の皮 苺も花の 絶へぬる竹の 束ねる枇杷の  
 束ねし稻や 搔赤さ

ちノ部

散る花うくる 茶の芽哉 茶をつむや 茶畑に 茶の花や

つノ部

茶摘む日 散るも雑木の 散るとて 花の千草に 光  
 る 千草の中に 縮んだ花の 茶の芽ののびて 茶の木畠  
 に 茶も手造や 茶の花散りぬ 遅々として桃の

蔓草の 釣柿の 釣の宿 蔦の秋 蔦這ふや 蔦やせの  
 蔦の窓 椿落ちて つくね藻 躑躅白く 躑躅満つ  
 苔許りや 苔ふくれぬ 蕾せゝりや 蔦のからまる 椿  
 一木の 椿見つけり 椿流すや 椿に残る

てノ部

照る葉の中や 照らす西瓜の 照られて早稻の

常盤木茂る 桃林に入る 遠き花見る 十日の菊や 常盤の松も 唐水仙や

とノ部

なノ部

茄子の苗 茄子に終日 茄子もぎて 苗代田や 苗分けた 苗一荷 苗配り 苗一把 苗負ふて 梨の花 梨 残る 檐の茅の 名なれ櫻の 何の花かや 名もなき花の 何を木蔭になかぬ木はなし 菜の花や 菜の初花の 菜の花曇り 菜の花里の 苗も節立つ 苗代時も 苗小田の 苗代の水に 撫子吹きぬ 茄子紫に 梨の接榎や

にノ部

二三りん吹く ち剪つて 菲畑 二番茅をふく 二月の梅や 二本の柳 二尺の松や 匂ふ黄菊や 憎くし花折る

ぬノ部

濡れ紅葉 濡葉をこる 濡れた柳の

ねノ部

ねぶか引く 根源畑や 根笹に明けて 根の張る春の 葱の坊主や 葱さげて

のノ部

海苔取りや 海苔廉の木に 海苔つく頃や

はノ部

花盛り 花あらばこそ 花に短き 花には曇る 花も降る  
 かと 花流れよる 花ちる芥子の 花見戻りの 花の冷た  
 き 花ふみけし 花散る頃の花の御宴の 花踏み行くや  
 花の葉や 花数ふへつ 花の吹く日や 花見ぬ命 花一時  
 に 花の上行く 花の雨なれ 花盗人や 英を辱ねて  
 花にも酔ふて 花も時雨るゝ 花の間ふ 花の匂はん 花  
 に寝る鳥 花も照らして 花さく波の 花ちる様に 花や

木の間に 花から温む 花おそかれと 花を空なる 花見  
 る人の 花は煙か 花の勞れを 花のちり込む 花ある軒  
 も 花の重たき 花を一夜の 花にかくるゝ 花に預けて  
 花の香やせん 花野見返る 花と水との 花にとられし  
 花音信ん 花野を戻る 花吹雪哉 花の雲 花の奥 花  
 の友 花り戻り 花の山 花嬉し 花守りし 花に蝶  
 花の下 花の瀧 花のくず 花の幕 花の宿 花の露ち  
 る 花ならば 花明り 花の蔭 花の婆沙 花の空  
 花晴て 花立つや 花茂 花の粉の 花の意地 花束や  
 花の杖 花も惜し 花の酔 花の間は 花の里 花  
 遠し 葉がくれを 葉の配り 葉雫も 葉に力 葉とな  
 りて 葉の寂る 葉の露連ぬ 葉ぶりから 初若葉 初

吹きや 萩の風 萩の奥 萩の宿萩の 萩の露 萩を傷  
 み 萩のちる 萩くゝり 萩の晝 萩の香や 萩の垣  
 茨さして 茨の宿 茨のとげ 茨の露 蓮の葉や 蓮  
 見から 蓮池に 蓮の實飛ぶ 芭蕉破れて 葉裏かすや  
 葉末は淡し 葉勝の多し 葉の餘けらるゝ 葉も重ねて  
 葉のなき梅や 葉かくれ梅の 葉裏を照らす 葉にも青柚  
 の 葉も散りくゝて 葉分に青し 茨に水まく 茨少し咲  
 く 茨一輪や 茨の香 薔薇赤して 蓮の巻葉や 蓮の  
 根堀や 萩こぼれけり 萩と桔梗や 萩を刈りたる 萩に  
 錢とる 芭蕉を愛す はつむ程咲く はつみか蓮の

ひノ部

一つ葉の一つ哉 瓢一つ 瓢箪下る 低ふ咲く 一葉ちる  
 まて 一枝咲さし 一葉一葉や 一枝青し 廣氣美し  
 緋桃咲たる

ふノ部

二葉より 藤咲いて 藤波や 藤の實は 藤棚の 落枯  
 れぬ 露の皮 露畑 露の雨 古葉残らず 降れば花な  
 り 封しつ花に 葡萄見上げる 葡萄の房の 芙蓉の峯の  
 芙蓉の影や 藤土につく 藤咲く棚の 藤は庇に 藤の若  
 葉の 露の葉裏に 露の葉蔭や

へノ部

紅の花咲く 紅菘並ぶ 絲瓜の棚の 絲瓜切れ手や 絲瓜  
に残る 絲瓜の花に

ほノ部

穂芝吹くや 穂草哉 穂に出て、 穂こぼれの 穂明やり  
穂の走しる 牡丹の紅をはく 牡丹咲きたる 牡丹剪つ  
て 牡丹蕊 細々草の 穂うけて長さ 穂遅き菱の 穂  
にあらはるゝ 穂波の揃ふ 牡丹に残る 牡丹久しく 牡  
丹開くや 牡丹見せけり 灯賣りや鬼灯赤ふ 鬼灯鳴らす  
北院の梅の ほどけば柿の

まノ部

豆の花 豆夾の 豆を打づ 先菊の香に 松の琴さく  
松を吹くなり 松葉集めて 松にも花の 松の高し 松の  
秋あり 松に聲あり 松聲かなり 松に盡させぬ 松の黒  
さや 松茸飯や 松茸を得る 松の根を洗ふ 松葉こぼる  
松に時雨て 松に聳ゆる 松植去るや 松の落葉や  
松風高し 卷葉哀む 蒔かぬ絲瓜の 豆蒔く様や

みノ部

密柑畑 密柑面 見せに 咲きしか 見かへす花や 見  
下す花の 谷や尾花の 谷に落穂も 密柑くさりぬ 密柑  
轉げぬ 満ちて牡丹の 満ち咲く茨の

むノ部

麥日和 麥の丈け 麥の風 麥刈りや 麥秋の 麥積ん  
 て いら芝 いら尾花 結ぶ野に吹く 麥は焼みて 麥  
 盗人よ 麥蒔く土の 麥藁畑 の麥の陽氣や 麥や菜種や  
 麥に巢をくふ 麥の深みへ 麥になぐさむ 木槿垣

めノ部

芽をふきぬ 芽の緑り 芽張り時 芽蒔哉 芽活哉 芽  
 活哉 目に立つ花や 芽を吹く時を 芽や未だ青し 雌  
 松活りの 女松生へ添ふ

もノ部

植 紅葉する 紅葉時 紅葉散るや 桃櫻 桃散るや 桃提  
 げて 桃李 桃の宿 桃の株 藻屑哉 藻に隠る 藻  
 鹽草 紅葉に寂ひて 紅葉も染めて 紅葉に残る 紅葉と  
 交る 紅葉に薄し 桃の日和や 桃の主や 桃に宿かる  
 桃に垣して 桃の落花の 藻に寄る日なり 藻から濁るや  
 葎の花の

やノ部

(245) 物  
 柳散るや 柳に届く 柳隔てし 柳に吹けよ 柳の町や  
 柳の門を 柳活けたる 柳の雨や 柳にくれて 柳も古き

柳の汀 柳に闇さ 柳から 柳の髪や 柳吹く 八  
束穂や 野菜畑 野草取り

ゆノ部

百合の香や 柚の花咲さぬ 夕顔の門 夕顔に似て 夕邊  
の菊の

よノ部

よは蘭のさく 四方の緑りや 四日は花の 嫁菜しほれて  
蓬延びけり

らノ部

落花哉

蘭園に

蘭の苞

蘭亭に

蘭の主

蘭の香や

蘭の庵

落花して

落花浮ふや

落花の風や

落花は水

に

蘭に水やる

蘭の價を

蘭醫の無實

りノ部

林檎めす

林檎すとしさ

林檎ひく手の

林檎の花や

林

摘を撰ぶ

るノ部

若葉した

若緑り

若葉屑

若葉吹く

若芽哉

若葉時

若菜籠

早稻香ふ

早稻の出来

早稻一穂

早稻作り

早稻の香哉

病葉や

若葉見に行く

若葉の露や

若葉を

迎る 蕨の外や 蕨のこぶし

# 俳句熟語字彙 終

明治四十一年八月廿一日印刷  
明治四十一年九月一日發行

俳句熟語字彙  
正價貳拾錢

著作  
所有

著作者 椎名辰之助  
著作者 寒川陽光

發行者 岩崎鐵次郎

印刷者 山田義清

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

發兌

東京市神田區鍋町二十一番地  
(電話本局三〇六七番)  
振替貯金口座番號四五一七

大學館



河井醉茗君序 川崎世外君著

# 新體詩作成自在

郵價 稅二 四十 錢錢

佐々木信綱先生題 文學士 佐藤芝峯先生序  
文學士 武島羽衣先生序 鹿島櫻菴先生編

# 名家模範新體詩集

郵價 稅二 四十 錢錢

本書は現代卓越せる新體詩家、蒲原有明、薄田泣菫、平木白星、馬場孤蝶、上田萬年、尾上紫舟、岩野泡鳴、與謝野鐵幹等數十氏が春、夏、秋、冬、戀、別離、哀傷、羈旅、詠物、歴史、雜等十餘題に渉る傑作殆んど百有餘篇を蒐めたるもの、新體詩研究者座右の寶典なり

文學士 大町桂月先生序、鹿島櫻菴先生著

# 詳解新體詩獨習

郵價 稅二 四十 錢錢

本書は著者多年研究の結果用意周到なる筆を以て明治國詩たる新體詩の性質を明にし其作法に就いて諸多の参考書に依り或は文章を新體詩となす手段、叙景、抒情、叙事各體に就いての作法凡て傑出せる作例を擧げてこれを指示し用語辭句を網羅せる等親切叮嚀の獨習書なり。

佐々木信綱先生題 千勝義重先生著

# 萬葉短歌全集

郵價 稅二 十五 錢錢

◎萬葉集は萬葉假名と稱する眞字を以て書かれたれば閱讀に不便を感ず依て本書は普通文字に改めて破究の便を圖る◎本書は四季、戀、雜の三篇に分ち更にこれを諸部類に分類せり。

文學士辰巳小次郎先生序、岩井松風軒著

# 遊仙窟評釋

郵價 稅二 十五 錢錢

井口紫瀟先生著

# 和漢朗詠集評釋

郵價 稅二 十五 錢錢

與謝野鐵幹先生題、鹿島櫻菴先生著

# 名家模範新派歌集

郵價 稅二 十五 錢錢

與謝野鐵幹先生題、蝦河原無鳴先生著

# 詳解新派和歌獨習

郵價 稅二 十五 錢錢

伊藤銀月先生評、百字文會本部編

# 細評模範百字文集

郵價 稅二 十五 錢錢

井口紫瀟君著

# 明治大家美文資料

郵價 稅二 十五 錢錢

柳川春葉先生序、三津木春櫻、井口紫瀟兩君著

# 文學美辭資料

郵價 稅二 十五 錢錢

文學士 栗田木岡君序、渡邊幾石君著

# 資料美辭麗句

郵價 稅二 十五 錢錢

# 東京帝國大學教授文學博士芳賀矢一先生序

法學士 侯野節村先生編

名家文庫 第一編

# 傑作模範紀行文集

郵價 稅二 十五 錢錢

名家文庫 第二編

# 白砂青松

郵價 稅二 十五 錢錢

名家文庫 第三編

# 清風明月

郵價 稅二 十五 錢錢

名家文庫 第四編

# 巖下滴泉

郵價 稅二 十五 錢錢

名家文庫 第五編

# 水村山郭

郵價 稅二 十五 錢錢

名家文庫 第六編

# 紅葉青山

郵價 稅二 十五 錢錢

名家文庫 第七編

# 江山烟雲

郵價 稅二 十五 錢錢

名家文庫 第八編

# 閑雲野鶴

郵價 稅二 十五 錢錢

名家文庫 第九編

# 雪裡野梅

郵價 稅二 十五 錢錢

前華族女學校講師 近藤正一先生著  
**百人一首詳解**

郵價 稅十 四三 錢錢

佐々木信綱先生題 千勝義重先生著  
**三十六歌仙集評釋**

郵價 稅十 四五 錢錢

文學博士 木村正辭先生題 千勝義重先生著  
**萬葉集評釋**

郵價 稅四 八十 錢錢

西行法師 **山家集評釋**

郵價 稅二 四十 錢錢

**新派和歌評釋**

郵價 稅二 四十 錢錢

**俳句入門叢書**

正價各十二錢 郵稅各四錢

- 第一編 內藤鳴雪翁著 (八版) **俳句獨習**
- 第二編 佐藤紅綠君著 (五版) **蕪村俳句評釋**
- 第三編 河東碧梧桐君著 (四版) **其角俳句評釋**
- 第四編 內藤鳴雪翁著 (三版) **芭蕉俳句評釋**
- 第五編 內藤鳴雪翁著 (三版) **芭蕉俳句評釋**
- 第六編 寒川鼠骨君著 (五版) **俳句新歲事記**

- 第七編 內藤鳴雪翁 寒川鼠骨君共選 (三版) **夏大家模範俳句集**
- 第八編 內藤鳴雪翁題、寒川鼠骨君 (參版) **初學俳句案内**
- 第九編 內藤鳴雪翁著 (再版) **七部集俳句評釋**
- 第十編 內藤鳴雪翁、寒川鼠骨君共選 (再版) **秋大家模範俳句集**
- 第十一編 寒川鼠骨君著 (再版) **大家俳句練習談**
- 第十二編 寒川鼠骨君著 (再版) **明治大家俳句評釋**

萬葉集の和歌は難解にして國文を學ぶもの、常に難ざる處なり本書は眞字を普通の假名に改めて四季に類題を分ちて平易に釋義を試み且つ評言を加へたる珍書なりとす。

西行法師の略傳、俗にありし時の法師、脱俗後の逸事、當時の歌壇に於ける西行、四行自身の歌に對しての考、四行の詞藻、西行法師の自讃歌、閑寂の趣清逸の氣に富める幽詭にして高致なる歌、織麗巧緻なる歌と、戀、無常、神祇、釋教、祝賀、贈答悉く正確なる原本に依つて、最も平易に全集を評解す。

西行法師の自讃歌、閑寂の趣清逸の氣に富める幽詭にして高致なる歌、織麗巧緻なる歌と、戀、無常、神祇、釋教、祝賀、贈答悉く正確なる原本に依つて、最も平易に全集を評解す。

# 初學俳

- 內藤鳴雪翁題 第一運座 俳句會必用全集 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 編 必携 俳句會必用全集 價二十錢 郵稅四錢
- 內藤鳴雪翁題 第二四季 芭蕉蕪村俳句全集 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 編 分類 芭蕉蕪村俳句全集 價二十錢 郵稅四錢
- 內藤鳴雪翁題 第三四季 芭蕉七部集俳句全集 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 編 分類 芭蕉七部集俳句全集 價二十錢 郵稅四錢
- 內藤鳴雪翁著 編 第五 蕪村七部集俳句評釋 價二十錢 郵稅四錢
- 內藤鳴雪翁著 編 第六 蕪村七部集俳句評釋 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 編 第七 春子規、鳴雪、夏碧梧桐、屋子 明治四大家大俳句集 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 編 第八 秋子規、鳴雪、冬碧梧桐、虛子 明治四大家大俳句集 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 編 第九 春明 治名家俳句集 價二十錢 郵稅四錢

# 句叢書

- 寒川鼠骨君著 第十 依 明治名家俳句集 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 編 第一 古今滑稽俳句集 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 第二 春子 規俳句評釋 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 第三 秋子 規俳句評釋 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 第四 春 芭蕉十哲俳句評釋 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 第五 秋 芭蕉十哲俳句評釋 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 第六 續 蕪村俳句評譯 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 第七 俳句熟語彙 價二十錢 郵稅四錢
- 寒川鼠骨君著 第八 俳句熟語彙 價二十錢 郵稅四錢

桂湖村先生題 井口駒北堂著

漢詩入門 第四編 杜子美詩集評釋

郵價 稅廿 四五 錢錢

和漢名家 歸省詩評釋

郵價 稅十 四五 錢錢

河村北漢先生著 懷鄉詩評釋

郵價 稅十 四五 錢錢

長田偶得先生著(肖像筆蹟入) (三版) 正氣歌評釋

郵價 稅十 二三 錢錢

文天祥 正氣歌評釋 藤田東湖 石橋玄潮君編 (五版)

郵價 稅十 二三 錢錢

韻花天月地 緒方流水君序、石橋玄潮君著 (四版) 新體詩指南

郵價 稅二 四十 錢錢

伊藤銀月君序 伊藤天穎君篇 思潮 大景文士寶典

郵價 稅三 六十 錢錢

河東碧梧桐君著 新俳句研究談

郵價 稅三 六五 錢錢

文學士沼波瓊先生序、池田錦水先生著 獨習 川柳入門

郵價 稅二 四五 錢錢

野口寧齋先生序、宮崎來城先生著 (再版) 漢詩作術

郵價 稅三 六十 錢錢

井口駒北堂著 白樂天琵琶行評釋

郵價 稅 四 錢錢

大橋直哉先生著 著名漢詩評釋

郵價 稅十 四五 錢錢

信天恕軒翁序、岩井松風軒先生著 (六版) 長恨歌評釋

郵價 稅十 四五 錢錢

室直哉先生著 漢詩獨習

郵價 稅十 四五 錢錢

第一編 詳作法 漢詩獨習

郵價 稅廿 四五 錢錢

古誠貞吉先生序 駒北堂主人著 白樂天詩集評釋

郵價 稅廿 四五 錢錢

第二編 田忠義君題 駒北堂主人著 李太白詩集評釋

郵價 稅廿 四五 錢錢

漢詩入門 第三編 李太白詩集評釋

郵價 稅廿 四五 錢錢

兒玉花外君選

# 青年新體詩集

價二十錢  
郵稅四錢

本集は現代青年新體詩家の苦心の作にかゝる佳篇を選者が嚴密なる批評の下に集録せるものに握つて天下に雲の如く起りたる多くの詩歌を見よ、人民と爾等の上而降したる露と雨と虹とを而して赫奕たる大光明を視よや」と本書の眞價値はこれに盡きたりといふべし。

古賀圓藏君著

# 泰西キツス詩集

正價十八錢  
郵稅四錢

木村鷹太郎先生著 (バイロンの肖像數葉、愛人愛子墳墓寫眞)

# バイロンの大魔王

價四拾錢  
郵稅六錢

著者の序に曰く「バイロンの偉大なる天才に對して無限の敬意を表し、其詩の美と力と大とを愛して其社會より受けたる迫害に同情の涙を澆ぎ、其イタリヤに於ける義俠の精神に感じ、劍を杖きてケレンシアの獨立戰爭を援け、光榮ある死を遂げたる其英風を歎し、茲に此冊子を著はす」以て著者の意氣を見るべく、著者の價値を見るべし、英國に於ける詩人バイロンには遺傳幼時學校生活旅行結婚離婚、婦人の關係、英國訣別外國に於けるバイロンはスオツソル、エホチア、ラエンナ、ヒサセノア諸國の生活、バイロンの思想文學哲學には天地觀及び自我論、不平及厭世、人道と耶蘇教との衝突、快樂主義、女性及び戀愛觀、道徳觀、海賊及びサタン主義、英雄バイロンにはイタリヤの秘密政齋及ケレンシアの獨立戰爭、バイロンの死、バイロンの人物及び文學概評を擧げ、終りにバイロン年譜を掲ぐ。

253  
804

東京大學館發行

初學俳句叢書第十七編

253  
804

087430-000-7

特63-113

俳句熟語字彙

寒川 鼠骨

椎名 昇竜 / 編

M41

DBE-0780

